（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	田 中　慶 江
論文題目	心理臨床におけるまなざし体験の生成		

（論文内容の要旨）

本論文は、人間が関係性の世界に生きることを可能ならしめる最初の体験を「まなざし体験」という著者独自の概念でもって捉え、それがいかにして生成されるのか、すなわち人間が他者の視線にいかに気づき、関係性の土台を築いていくのかを、臨床心理学の観点から豊富な事例を通して明らかにしようとしたものである。

論文は、著者独自の概念である「まなざし体験」が著者の豊富な心理療法の体験からもたらされたことを明確に提示し、先行研究との異同を明確にした「心理臨床におけるまなざし体験の生成とは」と題された第１章、乳児が周囲との関わりの中でいかに自分自身をこの世に定位させ成長していくのかを、視線理解の発達を中心に事例を通して論じながら、自分というものが見守りの「まなざし」の下で発見されることを示唆した第２章「母子の見つめあいから生まれてくるまなざし体験の生成」、統合失調症者が自らを生成していく過程において、視線の一瞬の交差が生じた転換点となった心理療法事例のセッションを提示し、その視線の内在化の過程を「まなざし体験の生成」として論じた「『自分』の生成とまなざし体験」と題した第３章、面接関係から生成される描画がいかに変容し、どのように体験されているのかを、第３章の事例を通して考察し、セラピストの描く枠が「まなざし体験の生成」にどのように与っているのかを論じた第４章「描画における共に見る体験」、箱庭療法の治療的機能としての「まなざし体験の生成」を、コンサルテーション事例から検討した第５章「箱庭による二重の見守り」、いじめを契機に来談した思春期少女の事例を通して「まなざし体験の生成」がいかにして可能であったかを論じた第６章「まなざし体験の生成をもたらす箱庭・はり絵・折り紙遊び」、思春期の少女がイニシエーションを乗り越えるためにはどのような「まなざし体験の生成」が必要とされるかを論じた「思春期におけるまなざし体験の生成―初潮と猫イメージを用いて―」と題する第７章から成り、以上の論考を踏まえて、第８章「総合考察」では「まなざし体験の生成」として想定した見える領域と見えない領域、そして第３の次元について包括的に論じながら、「まなざし体験の生成」をもたらす構造的特徴を「入れ子構造」として提示し、クライエントを見守ることの本質が考察されている。

第１章では、心理療法体験を通して、クライエントとセラピストの関係を生み出し得るものは何かという問題意識に端を発して、Winnicott,D.W., Klein,M., Bion,W., Ogden,T.H., Balint,M., Stern,D.N., Lacan,J. など精神分析学派の先行研究をサーベイしつつ検討した結果、人と人との出会いの始まりを「まなざし」と捉え、人間が周囲との関係の中に生きていると体験し得る最も原初の関係性の概念を「まなざし体験の生成」と捉える視座を提示し、「まなざし体験の生成」をもたらすものは何なのかを事例を通して明らかにするという問題意識が明確に述べられている。

続く第２章では、K式発達検査と母子合同面接の経過を踏まえて、「お母さんの目の中にAちゃんがいる」と子どもが発することばの意味を、母親と乳児の見つめあいを根源とし、母親の見守りの「まなざし」の下で生成された、自分というものを発見しこの世に定位することを可能ならしめるものであることを「まなざし体験の生成」として論じられている。

第３章では統合失調症の心理療法過程が報告され、「まなざし体験の生成」をもたらした

（続紙　２　）

転換点となったセッションを基点として、「見ること」「見られること」「まなざしあうこと」が自分自身をこの世に生み出し定位させていく上での本質的な機能であることが詳細に論じられている。

続く第４章では、第３章の事例のクライエントが描いた描画を素材として、面接関係から生まれてくる描画の変容とその変容体験を自身の臨床感覚を手がかりに述べながら、セラピストの描く枠が「まなざし体験の生成」にとってどのように機能したのかが論じられている。

第５章では箱庭体験が取り上げられている。コンサルテーションとして箱庭を共に体験した事例を通して、「まなざし体験の生成」をもたらす箱庭療法の機能を砂箱の大きさという物理的側面と、「見守り」「見守られる」という面接関係の側面から考察されている。

第５章に続いて、第６章では思春期少女の事例が取り上げられている。そこでは、いじめにあったクライエントがいかに「まなざし体験」を生成させていったかを、箱庭、粘土、はり絵、折り紙の体験過程を通して論じられている。

第７章では、思春期の少女にとってイニシエーション体験を経ていくためにどのような「まなざし体験の生成」が必要とされるのかが、アニメーションと、２事例における初潮を迎えた少女と猫イメージとの関係から論じられている。

最終の第８章では、ここまでの考察を踏まえて、「まなざし体験の生成」をもたらす機能として、周囲との相互関係性の世界である「見える領域」と、自分自身との相互関係性の世界である「見えない領域」の２つの次元を繋いで循環させる機能をもつ第３の次元が必要であることが論じられている。そして、こうした機能的特徴に加え、「まなざし体験の生成」をもたらす構造的特徴を「入れ子構造」として紹介し、クライエントを見守るという、心理療法において最も本質的なセラピストの在りようが考察され、締めくくられている。

注）論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、４００～１，１００wordsで作成し審査結の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、心理臨床の実践領域における長年の心理臨床体験を基盤として、「関係」とはいかにして生まれるのかという、心理療法における根本的かつ本質的なテーマを事例を素材として考察したものである。

無意識を仮定する心理療法においては、クライエントとセラピストの「関係」が成立する機序について、それがセラピスト個々の臨床体験に拠るところが大きいために、一般性や臨床的説得力のある言語化はきわめて困難であった。また臨床心理学においては、「関係」の重要性は実に多く指摘されているにも関わらず、それがなぜ重要なのかについての臨床的に価値ある論述はほとんど見られなかった。このように、「関係」をめぐる臨床体験に基づいた論考が待たれるなかで、本論文はこの領域に大きな貢献を成すものと評価することができる。

論文ではまず、臨床心理学・精神分析学を中心にこのテーマに関する先行研究が丁寧にサーベイされ、それと自らの臨床体験とを照合しつつ、先行研究と臨床体験の往還がくり返され、それによって人と人との出会いの始まりを「まなざし」と捉える観点が提示されている。「まなざし」とはたんなる視線や目の表情を意味するのではなく、それを巡って人間存在の多種多様な体験が生成する「関係」の始まりの人間の在りようであり、そうした在りようが「まなざし体験」と呼ばれ、「まなざし体験の生成」をもたらすものが何であるのか、すなわち「関係」とはいかにして生まれるのかというテーマが、事例を通して明らかにしようと試みられている。その際の手がかりとして、「関係」を周囲の人間・物との相互の関わり合いの領域と、自分自身との関わり合いの領域というふたつの次元が想定され、前者を「見える領域」、後者を「見えない領域」と呼び、「まなざし体験の生成」とはこの両者の織り成す世界に自己存在を定位させていくことであると想定されている。一見、この想定は自明に思われる。しかし、本論文の独創的な点は、この想定をもとに事例を丁寧に検討することによって、「まなざし体験の生成」をもたらすものが何であるのかが考察されているところにある。また、論文全体には、そうした探究は臨床体験と事例を通してはじめて可能になるという主張が通奏低音として流れており、それが本論文の独創性をさらに高めている。

「まなざし体験」はまず、母子関係の事例を通して論じられる。この世での人と人との出会いの始まりでもある母子の事例を通して、母親の瞳に映る自分自身を発見する乳児の言葉は、原初的な母親と乳児の見つめ合いにその根源があり、母親の見守りの「まなざし」の下で自分を発見したときに発せられるものであると論じる。この論考において、「まなざし体験」には「見守る」という在りようが不可欠であることが示唆され、第8章「総合考察」に反映されることになる。

次いで、このような「見守り」の体験がきわめて少ないと考えられる統合失調症者との心理療法事例を取り上げて、「見る」「見られる」「まなざしあう」という体験が自分自身を生成していく上で本質的な機能として働くことが論じられている。たとえば、心理療法のあるセッションにおいて、クライエントが恐怖の「まなざし」でセラピストを見つめる視線をセラピストが体験したことを契機に、自分自身の「まなざし」がクライエントをその存在の根底から支えていたことをセラピストが知るといった、きわめて臨床性豊かな発見がそこに認められる。またここから「まなざし体験」は「共に在る」という機能を含む

（続紙 ４ ）

ことが論じられている。

以上のような臨床体験からの考察は、統合失調症者への心理療法的接近にとって不可欠とされながらその在りようが曖昧であった「シュヴィング的接近」の本質が「まなざし体験」であることを自身の臨床体験から指摘したものであり、きわめて意義ある知見と言うことができる。

このように、「まなざし体験」には「見守る」「共に在る」という人間存在の様態が機能していることが事例を通して明らかにされており、その論述は臨床体験に基づいたものであるだけに説得力があり、また心理療法の本質を示唆するものとして非常に高く評価できる。

さらに、この「まなざし体験の生成」をもたらす「見守る」「共に在る」という様態は、描画や箱庭などの非言語的要素の強い心理療法技法を用いた事例においても深く考察されている。

描画では、心理療法における関係性が生み出すものとして描画を捉えた事例の考察から、描画を「共に見る体験」は、描画を固定的に捉えてクライエント、セラピスト、描画という三項関係から理解するのではなく、Winnicottが提示した「潜在空間」のように、描画という対象の周囲に漂う曖昧なものを共に体験していく在りようとして理解するべきであることが臨床的に論じられている。

箱庭においても、その臨床的意味として従来クライエント、セラピスト、箱庭という三項関係で理解されてきた在りように対して、箱庭はクライエントとセラピストの「関係」を生み出す機能をはたしているという、きわめて臨床的に意味深い論が展開されており、そのような生み出す機能を、三項関係に対して「入れ子的セラピスト・クライエント関係」と呼び、その機能について「まなざし体験」から論じられている。

以上のような臨床的考察に基づいて、最後に、「関係」が生まれる端緒となる第3の次元の機能が論じられて、「まなざし体験の生成」における構造的特徴を「入れ子的セラピスト・クライエント関係」から考察されている。

このように、本論文はクライエントを見守ることを通して「関係」が生まれてくることの本質を事例を通して明らかにしたものであり、臨床心理学の領域に大きな貢献を成すと判断される。ただ、著者の論述はともすれば臨床感覚に頼りすぎるきらいがあり、論理的整合性に弱い部分もないわけではない。けれども、そのことは著者の今後の課題を明らかにするものであって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成22年1月29日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降